

新オルガニストを迎えて 就任コンサート開催

この春、東京芸術劇場オルガニストに就任する
徳岡めぐみとジャン＝フィリップ・メルカールト。
意気込みや楽器に寄せる思いを語ってもらった。

東京芸術劇場が世界に誇るコンサートホール
のオルガン。その正オルガニストに、令和5年
度から徳岡めぐみとジャン＝フィリップ・メル
カールトが就任する。二人はこれまでもコン
サートでたびたび当館のオルガンを演奏し、音
楽ファンからの高い支持を得てきた。

「初代の正オルガニストである植田義子さんは
私の恩師に当たります。初めてこのホールのオル
ガンを聴いたのは、植田先生のコンサートで、
私が東京藝術大学に合格し、兵庫県から上京し
て間もなくの頃でした。ルネサンス、バロック、
そしてモダンの3つの時代様式を備えた“回転
式”のオルガンを目の当たりにして、圧倒された
のを覚えています。これから私もこのオルガン
で、幅広い時代のレパートリーをお届けしてい
くのが楽しみです」(徳岡)

1995年から正オルガニストを務めたのは小林
英之である(この春より小林はオルガン・アド
バイザーに就任)。ベルギー出身のメルカールト
は、パリ国立高等音楽院時代に来日し、小林よ
り“回転式”の魅力あふれるオルガンについて
話を聞き、また実際に演奏するチャンスも得た。
2004年のことだった。

「パリでも“日本の回転するオルガン”について
は話題になっていましたが、私は信じられなく
て、ジョークだろうと思っていたんです(笑)。
しかし実際に小林さんからお話を伺い、演奏
する機会もいただいて、私自身のオルガンのイ
メージが変わるほどの経験となりました。ヨー
ロッパではオルガンというと教会にある古い楽

器が中心なので、日本のホールのオルガンに未
来を感じましたね」(メルカールト)

夫婦でもある二人は、それぞれのオルガンや
音楽に対する考え方や得意とする分野などを尊
重し、互いに触発し合うパートナーだ。

「二人ともJ.S.バッハの作品を大事に思ってい
るので、それぞれの見解から熱い議論を交わすこ
ともあります。私は学生時代から、どの時代の作
品も満遍なく学び、多様なレパートリーを持つ
ことを大切にしていますが、北ドイツで学んだ
経験から、ブクステフーデなどバッハ以前のバ
ロック時代の音楽には特に心が躍ります」(徳岡)
「私はフランクやメシアンなど、19～20世紀の
フランス近代のオルガン作品が大好きです。

私と彼女では異なる感性、異なる耳を持って
いるので、同じ曲を弾いても仕上がりはかなり
異なります。それぞれの持ち味も楽しんでいた
だけだと思います」(メルカールト)

二人は2007年より日本に拠点を置き、それぞ
れに各地のホールオルガニストや教育機関での
指導を行ってきた。

「ホールオルガニストの仕事とは、オルガンを
絶えず最良の状態に保つために、普段から定期
的に楽器を鳴らす“弾き込み”作業を行うなど、
メンテナンスにも力を注ぎます。また、多くの来
場者にオルガンの演奏を聴いてもらうだけでな
く、実際に触り、演奏を体験してもらう講座も
行います。一人でも多くの方にオルガンのファ
ンになっていただきたいです」(徳岡)

「日本のホールでは、教会歴にとられること

なく、いつでも美しい作品を紹介できるので、
幅広いレパートリーの素晴らしい作品をどん
どん取り上げたいです」(メルカールト)

6月22日には二人の就任記念コンサートが開
かれる。

「3つのオルガンを存分に駆使して、17世紀か
ら20世紀に及ぶ多様な作品をお届けします。ソ
ロによる演奏のほか、回転式オルガンの両面で

それぞれ連弾も行います」(徳岡)

「これまで私はオーケストラの作品などをオル
ガンのために編曲してきましたが、この日の
ためにバッハのブランデンブルク協奏曲第2番
と、ドビュッシーの『夜想曲』より『祭』のアレン
ジを連弾用に書き下ろしました。私たちの演奏
をぜひお楽しみください!」(メルカールト)

取材・文：飯田有抄(クラシック音楽ファシリテーター)



© K.Miura

6月22日(土) 19:00開演
コンサートホール
詳細はP11へ

出演
オルガン：徳岡めぐみ、
ジャン＝フィリップ・メルカールト

その
他の
オル
ガン
・ブ
ログ
ラム

ナイトタイム・
パイプオルガンコンサート
各回 19:30開演
詳細はwebサイトへ



ランチタイム・
パイプオルガンコンサート
各回 12:15開演
詳細はwebサイトへ



東京芸術劇場
パイプオルガン講座
詳細はwebサイトへ

